

ザンダーと『二〇世紀の人間たち』

ザンダーはケルンにスタジオを持ち、腕のいい肖像写真家として尊敬を集めていました。ところが一九二〇年頃から、彼はとてつもない大計画を実現するために活動を開始します。同時代のあらゆる階層、あらゆる職業のドイツ人のポートレイトを撮影し、それらを構成して『二〇世紀の人間たち』と題する組写真をまとめあげようという壮大なプロジェクトです。その全体は「アーキタイプ（原型）」と呼ばれる基本ファイルと、七つのグループに分類されていました。グループ1は「農夫」、以下「職人」、「女性」、「職業と社会的地位」、「芸術家」、「大都市」、「最後の人間たち」という分類です。さらに各グループには十二枚一組のファイルが属していました。たとえば「農夫」のグループなら「若い農夫」、「農夫の子供と母親」、「農夫の家族」、「農夫——その生活と仕事」、「農夫の典型」、「小さな町の住人」、「スポーツ」に分かれています。このファイルの数は四十五あります。つまり『二〇世紀の人間たち』は全部で五百五十二枚の写真によって構成されることになります。

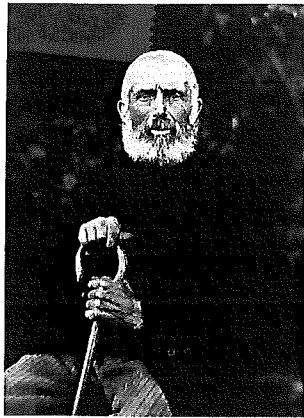
この野心的としかいいようのない大計画を、彼は時に息子の手は借りたものの、ほとんど一人でやりとげようとしました。一九二九年にはその中間報告ともいべき写真集『時代の顔』が出版されましたが、その中に多くのユダヤ人の肖像が含まれていたため、ナチスが政権を掌握すると、彼の活動はさまざまな妨害を受けるようになります。彼自身は必ずしも積極的な反ナチス思想の持ち主ではなかったのですが、あらゆる人々の肖像を平等にファイルしていくという彼の構想が、ナチスの人種差別主義には危険なものと映ったのでしょう。さらに戦後の一九四六年になって、自宅の地下室に保存されていた三万枚のネガが焼失するという悲劇がおこります。結局、『二〇世紀の人間たち』は、ザンダーの生前には完成しませんでした。彼の死後、残されたプリントやネガから、『二〇世紀の人間たち』を再構成しようという試みが続けられています。が、いまだに完全な形にはなっていない。

実際の作品を見ていただきましょう。まず「アーキタイプ」のファイルから、「大地の男」(23)。ザンダーが生まれ育ったドイツの大地に根ざして生きる農民たちの肖像写真を元にして、彼は「二〇世紀の人間たち」を基本的な類型に分類しようとした。「大地の男」、「哲学者」、「反逆者」、あるいは革命家、「賢者」の四つの「アーキタイプ」です。

このような分類は一見厳密で、科学的なものに思われますが、それほど根拠があるわけではなく、むしろ彼の生の経験の蓄積による直観に頼っているようです。ザンダーの撮影法は人物を正面に見据えたシンプルなもの、余分な装飾的要素はまったくありません。しかし、そこにはモデルと写真家との畏敬と信頼の関係が息づいているように感じます。

もう一点、十番目のファイルである「労働者——その生活と仕事」からの写真で「レンガ運びの職人」(24)を撮影したものです。ここでも正面向きの堂々としたポートレートから、この若者の仕事への誇りが伝わってくるようです。レンガを運ぶやり方や若者の服装の細部などの情報を読み解く愉しみも、ザンダーの写真の魅力の一つです。彼はいつでもモデルの個性や性格だけでなく、彼らの時代や社会との関係を示すしるしを、正確に写しとろうとしました。そのことによって、彼の肖像写真は一九一〇—三〇年代のドイツの、もはや失われてしまった「人間たち」の姿を総合的に定着した、優

②—アウグスト・ザンダー「大地の男」
(一九一〇)



④—アウグスト・ザンダー「レンガ運びの職人」
(一九二八)



れたドキュメントになっています。

ザンダーが撮影したのは、農民や都市生活者だけではなく「旅する人たち——ジプシーと放浪者」、「政治的囚人」、「愚者、病人、狂者、死者」などといった、やや特異な人間たちの集団を扱ったファイルもあります。「愚者、病人、狂者、死者」のファイルの最後に置かれた写真は老婦人のデスマスクで、端的に「物質」というタイトルがついています。ザンダーはこれら、普通は分類の網の目から洩れるであろう人々も含めて、「二〇世紀の人間たち」の「全体」を把握するという夢にとり憑かれていました。もちろんナダールのように「個人」に収束するのではなく、社会的な存在としての人間の全体像です。未完には終わったものの、そのプロジェクトのスケールの大きさは比類ないものがあります。